

取組の名称		“再生の杜”を核としたネイチャーポジティブ貢献	
活動主体（団体名）		清水建設 株式会社	
活動主体（団体名）（フリガナ）		シミズケンセツ カブシキガイシャ	
取組の内容 （自由記述）	①概要	都市における人と生物の関係の再生を目指し、2006年に江東区の臨海部に都市型ビオトープ“再生の杜”（約2,000㎡）を創出した。 希少種の保全等に取り組むとともに、行政やNPO・市民団体等と連携し、気候変動適応や環境教育など、様々な社会課題の解決に取り組む地域共創活動に挑戦している。	
	②取組内容を確認できるURL（または資料添付）	<a href="https://www.shimz.co.jp/company/about/sit/facility/facility13/">https://www.shimz.co.jp/company/about/sit/facility/facility13/</a>	
	③実施時期、頻度	2006年から通年で実施	
	④活動場所（所在地）	江東区	
	⑤活動の規模（参加者数）	社員約30名	
	⑥活動状況がわかる写真（撮影年月日）（既に実施している場合）※		
	2024年6月	2025年7月	
対応する社会課題 （該当する項目にチェック／複数選択可）		<input checked="" type="checkbox"/> 子供の福祉（子供の健やかな成長を社会全体でサポート） <input type="checkbox"/> 都民の健康・長寿（誰もが元気で心豊かに暮らせる地域の実現） <input checked="" type="checkbox"/> コミュニティ形成（誰もが集い、支え合うコミュニティを至るところに形成） <input checked="" type="checkbox"/> 防災・減災／気候変動対策（地球温暖化に伴う豪雨や自然災害等の被害軽減） <input checked="" type="checkbox"/> 地域振興（東京全体の生産性、魅力向上） <input checked="" type="checkbox"/> 観光・文化振興（人々のウェルビーイング、東京のプレゼンス向上） <input type="checkbox"/> 農林水産業の成長（危機に強い産業構造への転換） <input checked="" type="checkbox"/> 緑や水辺を生かした空間の創出／自然地保全・管理（都市機能を高め、世界を魅了）	
活用している生態系の機能 （該当する項目にチェック／複数選択可）		<input type="checkbox"/> 供給サービス（日々の暮らしに必要な資源を供給／食料、繊維、木材、水、薬品など） <input checked="" type="checkbox"/> 調整サービス（二酸化炭素の吸収） <input checked="" type="checkbox"/> 調整サービス（都市環境の質の向上／ヒートアイランド現象・暑熱環境の緩和） <input checked="" type="checkbox"/> 調整サービス（都市環境の質の向上／大気汚染や騒音の低下） <input checked="" type="checkbox"/> 調整サービス（災害の緩和／台風、洪水、津波、地滑り、雨水浸透、Eco-DRR） <input type="checkbox"/> 調整サービス（水質の浄化／窒素やリンの吸収、有機物の取り込み） <input checked="" type="checkbox"/> 調整サービス（花粉媒介／植物の世代交代、農作物の収穫量の増加） <input checked="" type="checkbox"/> 文化的サービス（精神を豊かにする機能／芸術的・文化的なひらめき、教育的効果、心身のやすらぎ、観光レクリエーションなど） <input checked="" type="checkbox"/> 基盤サービス（生息・生育環境の提供） <input checked="" type="checkbox"/> 基盤サービス（光合成による酸素の生成） <input type="checkbox"/> 基盤サービス（地力の維持及び栄養循環）	
貢献の内容 （自由記述）	①人間の幸福に対して	建物屋根雨水を水域で有効活用・一時貯留する雨水マネジメントを実装することで、下水インフラへの負荷を低減し、気候変動に適応した緑地へと発展させた。 生物多様性の普及・啓発の場として積極的に活用しており、青少年向け公開講座等や従業員研修等を通じ生物多様性教育を実践している(2008年～)。 NPO等との連携により企業緑地を暫定利用した自然体験プログラムを共創し、地域の子供たちが自然体験する機会を拡大した(2023年～)。 企業や行政等の見学やオープン研究会(2023年～)により産官学民へ成果を幅広く発信することでパートナーシップによるNbS推進の機運を醸成している。	
	②生物多様性に対して	臨海部の土地の履歴を踏まえ、水域から陸域への環境移行帯であるエコトーンを整備することで在来種を中心に多様な動植物が生息・育成できる場を創出・育成した。 長年にわたる動植物モニタリングに応じた順応的な生態系マネジメントを重ねることで、東京臨海部の埋立地において絶滅危惧種を含む300種以上が継続に確認されている。特に希少な水草・藻類が繁茂する水域では、水鳥やトンボ類が頻りに飛来しており、採餌・繁殖の場を提供することで生態系ネットワークに貢献している。 約30種の希少植物の域外保全に貢献している。セキュリティが高い研究施設の特性を活かし、緑地の過剰利用や侵略的外来種の持込(アメリカザリガニ等)を抑制している。	